

正述心緒 (新しい相聞往来歌)

2554 相見ては面隠さるるものからに継ぎて見まくの欲しき君かも

○西本願寺本万葉集

2554 對面者面隠流物柄介継而見卷能欲公親

【語釈】

\*相見ては…原文には「対面者」とある。面と向かつては、の意。

\*見まくの…直訳的にいえば、見ようとするのが(欲しき=したい)。「まく」は、「為まく」、「行かまく」、「言はまく」など、動詞を名詞化するという言葉。

【総釈】

結婚当初のまだういいういしい妻の歌である。

どんな場面だろうか。現代人として想像すれば、思いを寄せる男性にどこかで会うたびに、心をときめかす純情な娘の様子を思い浮かべるだろう。しかし「対面者」と原文にあることを考えると、初めて結婚して夫を迎えたときの若い妻の気持ちをうたつたものと思われる。「継ぎて見まくの欲しき君」とは、ずーと逢っていたいのに、朝になれば別れなければならぬことを恨んだ言葉である。

これは若い女性の純情さをうたつた貴重な万葉歌である。実際の結婚生活では、しばらく経つとこうした気持ちも無くなり、場合によっては夫が通つて来なくなることもあった。現代の結婚制度よりも男女の関係はゆるかったから、関係が冷えたときには他に心を寄せる男があれば、そちらになびくこともあったようだが、もし夫に対する信頼を失っていなければ、次のような歌も詠んだかも知れない。

2528 さ寝ぬ夜は千夜にありとも我が背子が思ひ悔ゆべき心は持たじ

「さ寝ぬ夜は千夜にありとも」とは、これから先のことで、この歌の時点では十日や半月の夜離れだったのであろう。女性の純真な気持ちから詠んだ歌かも知れないが、しましたこのような歌を相手に贈つて、ひたすら待ち続ける妻を演じてみせるのも、男を惹きつける方法ではあろう。

少し時代が下つた観念からは、このような作は「貞女」像を印象づける歌になる。諺にいわゆる「貞女、両夫にまみえず」と言う女性の理想が説かれた時代があった。この諺は中国の『史記』に、「忠臣不レ事二二君」。貞女、不レ更二二夫」とあるものだが、これが日本に受け容れられて、「忠臣」という男の道德と一対になった女の封建道德と

して定着した。しかし万葉集の右の歌は、いわば男性側の都合によって生まれた封建道徳によって歌われたものではなく、若い妻が夫の愛情を繋ぎ止めようとして詠んだ歌ととるべきだろう。

これに対して男がどんな歌を返したか、それを想像してみるのも楽しい。たとえば、気の毒だと思ふ気持ち少しでもあれば、何かと言いつつ、

2542 若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てむ憎くあらなくに

と、妻の心をいちおう繋ぎ止めるかも知れない。しかしそれでも次第に疎遠になって関係が絶えるときもあった。このような経過の中で、なお夫を忘れることができない純情派の妻の、しみりと心に響く歌がある。

2588 夕されば君来まさむと待ちし夜のなごりそ今も寝ねかてにする

\*かてにする…できない状態になっていること。全体は、夕べになればあなたが  
お出でなさったころの名残でしょうか、今もなかなか寝付かれないでいま  
す、の意。

これは夫に贈ったものではなく、独詠歌として鑑賞すべき歌である。しかも、このような独詠歌が生まれたのは、先にも述べたとおり中国の詩の一形態である閨怨詩に学んだものであった。

\*中国の閨怨詩は、夫が遠征したり、官職を求めて旅立ったときに残された妻の孤独を詠むが、和歌では通い婚を前提に夫が訪れなくなった妻の立場で詠まれる。平安時代の次の歌もそのような閨怨の歌である。

825 忘すらるる身を宇治橋の中たえて人もかよはぬ年そへにける

(古今和歌集 よみ人知らず)

これは嫉妬のために宇治橋に身を沈めたという橋姫の伝説を背景に生まれた和歌であろう。「忘すらるる身」とは夫がもはや通わなくなった妻の身をいう。

◇以上、夫婦の話題があまりに沈んだので気分転換に、先取りして巻十一からちよつと「おめでたい」男ののろけ歌を一首あげよう。

2651 難波人葦火焚く屋の煤してあれど己が妻こそ常めづらしき

難波は大阪湾に注ぐ淀川の河口で湿地が広がる葦の名所であった。「難波人」はそこに住む住民たちである。「葦火焚く」とうたうのは、難波では煮炊きなどにも葦を使つたからであろう。葦に限らず、家の中で火を燃やすと、長く年数が経つうちに家の内部全体が煤けて黒くなる。また煤けて黒くなった状態はつまり長い年月を経たあかしである。これを長年連れ添った古女房にたとえたのである。昔は「ぬかみそ女房」という言葉もあった。葦火を焚いて家の食事を作ってきたのも、その妻である。だからと言って体が煤けたわけではない。世帯の苦勞にやつれたのである。

末尾の「めづらし」の「めづ」は愛めでること、好ましく思つて受け容れる意であるが、要するに「常めづらしき」とは、いつ見てもかわいく思うといった意味である。日本人の男性は自分の妻に直接愛情の言葉を掛けることは苦手だった。万葉の時代でもこんな歌は珍しい例である。土屋・私注はこれも民謡と解釈して「民謡の清純を失はない調である」と評価する。民謡とまで言わなくとも、この歌はある集団的な場で歌われたものであるうし、またそれは教訓性のある歌として人々に歌い継がれたものでもあろう。

（万葉集の本文は中西進編著『万葉集全訳注』講談社文庫により、適宜諸注釈書によつて著者なりに修正した。）